

夏目漱石『こころ』論 —一家制度から脱出するKの行動分析—

鄭 子 焜*

1. はじめに

『こころ』は、『彼岸過迄』及び『行人』に続く漱石の後期三部作であり日本文学の傑作として広く知られている。この三作の共通性について、石原千秋は、「近代知識人の苦悩」や「近代的自我の問題系」をテーマとしている¹⁾と指摘した。このように、『こころ』は激動する明治時代を背景に、新旧思想の矛盾に生きる知識人の葛藤を書き出した小説である。しかしながら、明治三十年ごろ流行した家庭小説の風潮に乗った漱石は、『こころ』を「家族小説=明治民法小説²⁾」として書き続けたことから、インテリ人物の精神的な窮境の背後には、明治社会に浸透し家制度の存在が示唆されているのであろう。

これまで幅広くなされてきた『こころ』に関する先行研究では、主にエゴ論と善悪論に絞り、「先生」という人物の心理活動に注目し、個人の孤独と時代の矛盾を解明した考察が多く見られる。特に作者漱石と同じく「養子」の身分である「K」という重要人物に関する研究は、殆どが利己主義や宗教性関連の死因究明に関してである。『行人』や『それから』とは異なり、「家制度」の視点からの『こころ』の人物分析をした研究はまだ少ない。それ故に、「家制度」の視点から「K」の行動や心理活動をより詳細に考察する余地がある。

過去の研究では、Kの人間関係やアイデンティティに関する究明がかなりなされてきたが、彼の

家族像との関わりについての研究は限られている。例えば、李美正は「主体性を持つ個人を重視する民権論的な道を追求する非政治的な個人主義であった。清廉潔白で禁欲主義的に生きようとした³⁾」というKが求める「道」の正体を指摘した。また、前田友美は、「道」のため、つまり精神的な修養の意を表す「智」のために、養家を欺くほどのKであるから、そこに「情」は不要だったのである⁴⁾とKを「道」のため養家との「情」を捨てた人物と評した。しかし、これらの考察は主に三角関係からKの表現を分析した結果であり、Kの家族像による影響については触れていない。

一方、若林幹夫は、『こころ』や『道草』に描かれた家や親族、養子関係は、近代化以前の社会の編成原理に由来する構造をもつがゆえに、そのような個人性や性を少なくとも社会の内部の特定の局所的（ローカル）な場においては、全体論的な体型の中に埋め込むものであるからだ。⁵⁾と「家」「親族」「養子関係」を明治社会と個人を繋げる要素として見なしている。更に、『こころ』を「<私>が<先生>や<K>と同じく家郷とその親族を捨てて東京へ向かう物語⁶⁾」と「家郷」と「親族」を捨てる作品と解釈した。しかし、若林幹夫は具体的な家族像と養子になったKの内面の葛藤については包括的に考察していない。また、Kの家庭での生活経験が彼の行為に及ぼす影響についても、先行研究には見当たらない。

それゆえ、本研究では『こころ』におけるKの家族像に注目し、彼の個人的な成長と家庭環境との相互作用を考察していく。家から脱出したKの

*台湾大学・院生

行動に潜んだ葛藤と意識の解明によって、漱石文学と明治社会の相互関係が更に明白になっていくだろう。

2. 「家制度」に関する概念

今回の考察では、主に「家」、「家制度」、および「家父長制」に関する概念をめぐって論を進めていく。ただし、これらの用語に関しては、社会学および法学などの分野でもその定義や分類は多岐にわたる。そこで、本論文ではまず、先行研究を参考にしながら以下のように定義を定め、それに基づいて論証していく。

「家」について、竹安栄子の研究は、「(1)核となる家族(=「核的小結合」、ないしは「家族的核」)の単数または複数を (2)家父長制的な家長権の下に統合し、さらに (3)超世代的に永続せしめる原理であり、かつこの原理に基づいて成立するところの日本に特殊な家族の歴史形態と概念される」⁷と指摘した。つまり、「家」は家父長制の統合で、統括性と永続性を強調する概念である。

「家父長制」とは、岡田みゆきは「家長と家構成員との間における権威と恭順を基調とする支配関係が社会的に認められている制度⁸」と解釈した。

また、「家制度」とは、明治31年に公布、実施された民法第四編・第五編によって確立された「家」に関する法制度である⁹。これによって、「家」に付与された制約が更に強固になった。

以上の定義に従って、本稿は「家」に焦点を置いて、Kの家族像から分析していきたい。

3. 二つの家の板挟みになっていたK—その目覚め

『こころ』ではKという人物は養子として育てられた身分と設定はされており、これは意味深い点である。養子縁組の背後には、Kは実家と養家の二つの「家」に所属しているという事実がある。まずはKの人物像を検討し、それに基づいて彼の

家族像を分析していく。

先生と同郷であるKは「真宗の坊さんの子」として生まれ育った。そのため、仏教家庭で成長したKは「宗教とか哲学とか」の問題に深い興味を持っていた。Kの仏教趣味に関する表現を見てみよう。

寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。(下十九)

「精進」という用語は仏教の理念であり、「雑念を去り、仏道修行に専心すること」という修道精神と解釈されている。Kは「精進」という言葉を単なる言葉として捉えるのではなく、「行為動作」まで貫いたことから、仏教の教義はすでにKの性格に浸透している。また、「寺に生まれた」という表現から見ると、Kの人格形成は、家庭が寺であるという環境に深い関わりがあることがうかがえる。それに関して、先生の視点からの推測は以下のように述べられている。

これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、即ち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙かに坊さんらしい性格を有っていたように見受けられます。(下十九)

以上に示した通り、「父の感化」「生まれた家」「寺という一種特別な建物」という「家」と関連のある三つの要素がKの人格形成に影響を与えた可能性があることが示されている。ここでまず「父の感化」という要素に注目したい。前節で述べたように、家制度は家長権の下に統合され、家の家長と構成員の間には「権威」と「恭順」を基調とする支配関係が存在していた。具体的には、Kの父は家庭の中心人物であり、家の統括性において重要な役割を果たしていた。明治期の父親の権威について言及した岡田によれば、父親は「制度」「職業的・社会的な地位」「人格的」において

も家族の中で優越していると思われ、子供に尊敬の念を抱かせたり、自発的な服従を促すことができる影響力を持っている存在であった¹⁰。そして、Kの故郷である「本願寺派の勢力の強い所」において、父は経営した真宗寺も含めて「大抵裕福」な様子を示していた。その結果、仏教を修行する僧侶として同時に寺主として高い社会的地位を持つKの父が、社会的及び職業的に高い評価を受けていた側面が見られる。それとともに、父の性格には「義理堅い」点や誠実でカリスマ的力を持つことが観察されていた。また、Kは「母のない男」であるせいか、Kの教育において最も影響を与えたのは寺主である父親だった。したがって、Kは子供の時から理想的な目標として父親に導かれ、成長してきた。

父の影響と「生まれた家」、そして「寺という一種特別な建物」との関係は、Kにとっては真宗寺という宗教的な場所であると同時に、父と一緒に生活機能を果たす家という二重意義がある。喜多野清一は「家（家族）は各種の生活機能を営むとしても、その結合の基盤は人格的な融合合一を成している人々の結合である¹¹」と述べ、家は生活機能を提供するだけでなく、統括性の影響で同じ家に生活していた人々の人格的な融合傾向を形成していると指摘している。僧侶である父から伝わった仏教の教義は、寺である家を通じてKの日常生活の一部となり、日々強化されて家への帰属意識が生じた。すなわち、父が主導する家庭による統括性の影響で、Kは「普通の坊さんよりも遥かに坊さんらしい性格」、いわゆる「精進精神」を養ったと考えられる。

しかし、実家である真宗寺の宗旨と一致していたにもかかわらず、Kは中学時期に実家を離れて「医者之家に養子に行った」。その理由について、先生は以下のように推測した。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。然し次男を東京へ修業に出す程の余力があったかどうか知りません。又修業に出られる便

宜があるので、養子の相談が纏まったものかどうか、其所も私には分りません。(下十九)先生は「東京へ修業」に出す経済的な余力の有無という理由だけでは説明がつかず、曖昧な推測をしている。しかし、Kの実家である真宗寺は故郷において「大抵裕福」であり、「相応に暮らしていた」状況だったことから、その背後にはほかの理由があると考えられる。

そこで、実家におけるKの「次男」という身分に注目してみよう。竹安栄子によれば、家制度は「戸主権と直系嫡出長男子単独相続を核とする¹²」制度であり、家は統括性を強調する一方で、世代にわたって家を継続させる永続性も重視されていた。つまり戸主権を持つKの父親は家を統合すると同時に、寺の後任者を決定する権利も持っていた。Kは実家の精神に相応しいが、家制度の家督相続においては次男という身分は不適切な対象であった。家の相続は家主の相続だけでなく、家産の相続も含まれていた。Kの学資問題は経済的な支援を必要とし、家の財産と直接に関連していた。しかし家を相続する資格のないKにその家の財産を提供する理由は存在しなかった。つまり、家の相続において、次男であるKは除外されていた。結局、家父長は家制度の正統な相続性を維持するために、学資を理由に次男であるKを実家から養家へ出すことになったという可能性が考えられる。さらに、Kは「寺を嗣いだ兄」より「他家へ縁づいたこの姉」のほうに親しいと表現しており、養子として出されることに対するKの不本意から養家と実家との間に不和も生じた。

そして、中学時期に養子として出された後のKには「決して生家の宗旨に近いものではなかった」という精神的な変化が見えた。このことは正に実家との隔たりを意味するのではないか。この時期におけるKの「精進」精神について先生は以下のように評価した。

Kは昔時から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁慾という意味も籠っ

ているのだろうと解釈していました。然し後で実際に聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためには凡てを犠牲にすべきものだと云うのが彼の第一信条なのですから、摂欲や禁慾は無論、たとい慾を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。(下四十一)

Kが抱えた「精進」精神は、既にこの時期から実家の方針を超え、禁欲主義よりもっと深刻な意味を含んでいた。「道」という究極的な目標に向けて、強い犠牲意識を抱えており、私欲を主とするあらゆる「道」を妨げるものに対して、頑なに反対の姿勢を示していた。従って、実家の家督と家産という利益の相続から除外された時にKは、実家の教育から抜け出す覚悟はしていたのであろう。この覚悟は養家に入っても変わらず、Kの心をずっと支えていた。

Kの養家は「医者の家」で、「かなりな財産家」であり、そして、Kを養子として受け入れ、東京への学資を提供した。実家と異なり、Kは養子縁組において、養家の後継ぎとして迎えられた。一方、Kに対しては、養家の家業と同じ「医者にする」という明確な要求が出された。実家の家督と家産という利益の相続から除外されたKにとっては、家督相続を重んじる養家への帰属意識が薄い。すなわち、Kに提供した学資は、実家と養家の両方から押し付けられた一種の強迫観念のような附加条件であり、家督相続の義務を果たすという交換条件に過ぎなかったものである。

このような状況において、もし養家の方針に従ったら、Kにとって経済的に有利であることに違いない。しかし、道を追求するため精進精神を抱えたKは敢えて「医者にならない」という選択をした。今のKが求める「道」はまだ「よく解っていなかった」というぼんやりとした概念に留まっているが、「尊く響いた」この言葉はKに「気高い心持」を与え、養家で個性を失わず、自分の道への力の支えとなった。このように、Kは表で

二つの家に従っていたが、裏で東京への学資を騙し取る行動や、家制度への反抗が始まった。

4. 故郷に背を向けたK—行動

二つの家の影響で、Kは「道」を追求する精神や、家から脱出する決意が固まって来た。さて、東京に向かうKの最初の行動は、養家に内緒で、学資を使って「自分の好きな道を歩き出した」ということである。先生の視点から見れば、学資を騙し取ったKは動揺する様子が見えず、むしろ「知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸」を持った平然とした態度であった。しかし、東京に到着したKと先生は異なる姿勢を取っていた。まず、東京に対してKと先生の心理活動を見てみよう。

山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外を覗めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事を云っていたのです。(下十九)

ここで注目したいのは、二人は東京及び東京の人々に畏敬な態度を抱く一方で、「天下を睥睨する」と自らの大志を誇示するという、全く相反する態度をとっている点である。このような彼らの矛盾した態度は、実際に東京という都市と密接に関連している。明治時代の日本社会において、資本主義が著しい発展を遂げた。その中で、都市化の先駆者であった東京は、地方との格差もこの流れの中で顕著になっていた。若林幹夫は、「[家郷＝封建的前近代]・対・[東京＝近代]という進歩主義的で近代化論的な二つの項¹³⁾」と作品における地方と東京の対立構造をあげた。このように、地方出身のKも先生も故郷を離れ、都市へ向かう一員として、東京の繁華に対して少し戸惑いを感じていたのだろう。しかしながら、都市化は発達した街の空間だけでなく、人々の思想にも大きな影響を及ぼした。石原千秋は明治の都市化につい

て、「全国から東京に集まった人々を山の手に階層化して再配置することで、立身出世のコードを決定的に強化しました¹⁴⁾」と立身出世主義の具現化を指摘した。このように、「農村青年の向都離村傾向は毎年促進された¹⁵⁾」という潮流に乗ったKにとって、立身出世の思想は彼の求道志望を再強化させた。東京での学業において、Kと先生は「書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切っていた」と述べられており、これらの話題は私欲と離れた彼なりの立身出世の思想が色濃く表れていたことを示した。そのため、Kは大志を抱きながら東京を自分の志望を実現する理想的な場所と認識し、家から離れる決意を一層強めた。更に、このような考えはKの三回の帰省における行動にも反映されている。

「最初の夏休み」のうちに、Kは故郷へ帰る代わりに、「大観音の傍の汚い寺の中」で勉強することにした。しかし、乱雑な環境であっても、Kは「自分の思う通りに勉強ができたのを喜んでいる」という満足な気持ちを感じていた。Kは学業だけでなく、外国の宗教思想を代表した聖書や『コーラン』などの書物に深い興味を持っており、それらを「人の有難がる書物」と見なしていた。Kにこのような満足感をもたらすのは「勉強」という行為自体よりも、むしろ東京という環境である。学生として、東京で多様な学説に触れたことはKの知識欲を満たす一方で、家郷への精神的な依存も次第に弱まってきた。そして、当時の学生と社会の関係について、先生は以下のように述べた。

世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部的な空気ばかり吸っているので、校内の事は細大共に世の中に知れ渡っているはずだと思いきる癖があります。

(下二十)

明治社会において、豊かな知識を身につけた学

生はしばしば「比較的内部的な空気」に閉じこもり、外部である社会に対して、無関心な態度を示している。Kは一学生として、「封建的前近代」である故郷を離れて「近代」を代表する東京へ移行しつつある。Kにとっては、東京と故郷との距離は、経済的な差よりもむしろ思想文化の差である。それ故、「二年目の夏」に催促され、やむを得ず帰省したKは専門について一切言及しなかった。これは養家との間に隔たりが生じていたからであろう。そして、この遥かな距離の中で、養家の制御が弱まりつつある一方、隔たりは更に顕著になっていく。

「三度目の夏」という時点で、Kは故郷へ帰らず、ついに養家に「自分の詐りを白状してしまった」という行動に移した。叔父に裏切られ、止むを得ず家を離れたが、まだ故郷に未練がある先生とは異なり、Kは自白によって自ら家から脱出した。依田精一は、「[家]の内には上下の身分関係とそれに基づく支配と服従、恩と報恩(孝)の原理が支配した¹⁶⁾」と家の序列を解釈している。Kが使用した学資は、養家から受けた「恩」を象徴しており、家制度の枠組みでは、Kには養家の意志に従って「報恩」という義務を背負っていた。しかし、Kの行動は権威的な家長権に逆らい、家における階級序列を壊すことになった。その結果、Kは「養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました」。養家と実家に対して、Kは依然として故郷へ帰らないという強固な姿勢を保ち続けた。結局、表では実家に復籍したものの、実質的には勘当され、二つの家を喪失し、家制度から脱出することになった。

このように、故郷から東京へ来たKは裏の決心から表の行動に転じて、家制度への戦いを遂げ、結果的に「道」を追求する自由を手に入れた。しかし、これに続いてKに押し寄せるのは、学資など、現実的な経済問題である。

5. 家を脱出したK—彷徨

Kは家からの脱出によって、養家の存在意味である学資という束縛から解放され、精神的な自由を得たが、経済的にはまだ独立していない。Kは「夜学校の教師」を通じて「独力で己れを支えていった」自力生活を暫く送っていたが、学生でありながら「求道」と「仕事」を両立させる難関に直面した。また、「この過度の労力」はKの精神にも影響を与えた。

彼は段々感傷的^{センチメンタル}になって来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負って立っているような事を云います。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くようにも思っ、いらいらするのです。(下二十二)

先生の視点によれば、養家事件においてKは「度胸もあり勇気もある男」であることを証明した。しかし、家から脱出した後、Kは「感傷的センチメンタル」という精神衰弱に陥り、長年にわたる「道」への信念も揺らぎ出した。その結果、「道」を追求する「光明」も今の「彼の眼を遠退いて行く」ようになり、経済的な支援を失ったKは、自己否定な態度を示し始め、精神的な窮境に陥った。それを察した先生はKの回復のために、自分の下宿先へ招いたが、後日却ってKをお嬢さんと奥さんから成り立つ疑似的な家制度の渦に引き込んでしまった始末になったのである。

6. おわりに

以上のように、本稿では「家制度」の視点から『ころ』における登場人物Kの次男としての立場や養子身分に焦点を当て、二つの家の考察を通じて、Kの性格及び行動における心理活動との関係について分析を試みた。

まず、Kの実家の家族像を考察し、父親及び寺

である家の統括性がKの精進精神に与えた影響を明らかにした。そして、家の相続問題をめぐってKの次男身分の不安定性によって実家から放逐されたこと、それに引き続いて、養家の家族像を検討し、Kの反抗意識が二つの家庭の重圧から生じたことが明らかになった。次に、明治の時代背景を踏まえつつ、故郷から東京へ来るKの行動の分析を通して、裏から表へ変化した脱出過程の背後にある理由を解明した。最後に、二つの家から脱出したが、経済的な支援を失ったKは精神衰弱を引き起こし自己否定の窮境に陥った。なお、家制度の束縛から解放されたものの、Kは再び先生の下宿先という疑似的な家の桎梏に陥った。

Kの家からの脱出は実家及び養家の家制度の視点以外に、先生の下宿先である疑似的な家が与えたKへの影響も無視できない論点であるが、未亡人とお嬢さんたちから構成された疑似家族の下での家父長についての考察は今後の課題とする。

注

- 1 石原千秋 (2017) 『漱石と日本の近代(下)』 p.138
- 2 同1 p.126
- 3 李美正 (2001) 「夏目漱石の『心』論—三人の死を通して—」 『明治の精神』を中心として— p.246
- 4 前田友美 (2008) 「夏目漱石『心』研究—救いとしての「死」—」 p.77
- 5 若林幹夫 (2002) 『漱石のリアル—測量としての文学』 p.243
- 6 同5 p.18
- 7 竹安栄子 (1997) 『近代化と家族・地域社会』 p.70
- 8 岡田みゆき (1998) 「日本における父親の権威 (第二報) —明治期家父長制度下の父親の権威と現実の父親像との比較—」 p.26
- 9 同8 p.26
- 10 同8 p.27
- 11 喜多野清一 (1976) 『家と同族の基礎理論』 p.147
- 12 同7 p.202
- 13 同5 p.21
- 14 石原千秋 (2013) 『『ころ』でよみなおす漱石文学—大人になれなかった先生』 p.182
- 15 依田精一 (2002) 「日本ファシズムと家制度」、『日本家族史論集 家族と国家』 pp.155-156
- 16 同15 pp.181-182

テキスト

『漱石全集 第六巻 心・道草〔岩波昭和四十年版〕』
(1966年、岩波書店)

参考文献（年代順）

- 石原千秋（2017）『漱石と日本の近代（下）』新潮社
福島正夫（1967）『日本資本主義と「家」制度』東京
大学出版会
喜多野清一（1976）『家と同族の基礎理論』未来社
岡田みゆき（1998）「日本における父親の権威（第二
報）—明治期家父長制度下の父親の権威と現実の
父親像との比較—」『日本家庭科教育学会誌第41巻
第2号』、日本家庭科教育学会
李美正（2001）「夏目漱石の『心』論—三人の死を通
してみた「明治の精神」を中心として—」『広島大
学大学院教育学研究科紀要第二部50号』、広島大学
大学院教育学研究科、国立情報学研究所
竹安栄子（1997）『近代化と家族・地域社会』御茶の
水書房
依田精一（2002）「日本ファシズムと家制度」『日本
家族史論集 家族と国家』吉川弘文館
前田友美（2008）「夏目漱石『心』研究—救いとして
の「死」—」『広島女学院大学国語国文学誌38巻』、
広島女学院大学日本文学会
石原千秋（2013）『『こころ』でよみなおす漱石文学
—大人になれなかった先生』朝日新聞出版
若林幹夫（2002）『漱石のリアル—測量としての文学』
紀伊國屋書店